

東シナ海開戦8

超限戦

大石英司

Eiji Oishi

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～25頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 安田忠幸

目次

プロローグ	13
第一章 休戦日	18
第二章 国家に友なし	41
第三章 革命の闘士	67
第四章 越後屋	91
第五章 ベン・ネビス作戦	116
第六章 ウイングマン	141
第七章 奪還	166
第八章 ブラックアウト	184
エピローグ	194

登場人物紹介

日本

〈特殊部隊サイレント・コア〉

どもんこうへい
土門康平 陸将補。水陸機動団長。出世したが、元上司と同僚の行動に振り回されている。

〔原田小隊〕

ほらたたくみ
原田拓海 一尉。陸海空三部隊を渡り歩き、土門に一本釣りされ入隊した。今回、記憶が無いまま結婚していた。

はたけともゆき
畑友之 曹長。分隊長。冬戦教からの復帰組。コードネーム：ファーム。

たかやまけん
高山健 一曹。分隊長。西方普連からの復帰組。コードネーム：ヘルスケア。

おおしろまさひこ
大城雅彦 一曹。土門の片腕として活躍。コードネーム：キャッスル。

まちだ はるお
待田晴郎 一曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

たぐちしんた
田口芯太 二曹。部隊随一の狙撃手。コードネーム：リザード。

ひがひろみ
比嘉博実 三曹。ドンパチ好きのオキナワン。田口の「相方」を自称。コードネーム：ヤンバル。

あづまだい き
吾妻大樹 三曹。山登りが人生だという。コードネーム：アイガー。

〔姜小隊〕

かんあや か
姜彩夏 三佐。元は韓国陸軍参謀本部作戦二課に所属。司馬に目をかけられ、日本人と結婚したことで部隊にひっぱられた。

うるしげらたけとみ
漆原武富 曹長。司馬小隊ナンバー2。コードネーム：バレル。

ふくとめだん
福留弾 一曹。分隊長。鹿児島県出身で、部隊のまとめ役。コードネーム：チェスト。

い い かける
井伊翔 一曹。高専出身で部隊のシステム屋。コードネーム：リベット。

みずの とま お
水野智雄 一曹。元体育学校出身のオリンピック強化選手。コードネーム：フィッシュ。

にしかわしんすけ
西川新介 二曹。種子島出身で、もとは西方普連所属。コードネーム：トッピー。

み どうそう ま
御堂走馬 二曹。元マラソン・ランナー。コードネーム：シューズ。

あねこうじ さねあつ
姉小路実篤 二曹。父親はロシア関係のビジネス界の大家。コードネーム：ボーンズ。

かわにしまさふみ
川西雅文 三曹。元Jリーガー。コードネーム：キック。

ゆらしんじ
由良慎司 三曹。西部普連から引き抜かれた狙撃兵。コードネーム：ニードル。

おだぎりしやう
小田桐将 三曹。タガログ語を話せる。コードネーム：ベビーフェイス。

あびるあきら
阿比留憲 三曹。対馬出身。西方普連から修業にきた。コードネーム：ダック。

あかばねたくま
赤羽拓真 三曹。フィールドでのゲテモノ食いに長ける。コードネーム：シェフ。

〔訓練小隊〕

あまひひろし
甘利宏 一曹。元は海自のメディック。生徒隊時代の原田の同期。訓練小隊を率いる。コードネーム：フアラライ。

〔民間軍事会社〕

おとなしせいじ
音無誠次 土門の元上司。自衛隊退役者からなる民間軍事会社の顧問。〆ヘブン・オン・アース、内に滞在していた。

〔水陸機動団〕

しばひかる
司馬光 一佐。水陸機動団教官。引き取って育てた娘に店をもたせるため、台湾にいたが……。

まつおしやう
松尾捷 陸将補。団司令部の本部管理中隊と、第一陣の第一水陸機動連隊第二中隊を率いて魚釣島上陸作戦の指揮を執る。

はたけやまそういちろう
畠山惣一郎 一佐。松尾陸将補率いる部隊のナンバー3。

はくばごう
白馬剛 一佐。第一機動連隊連隊長。

かんだちゆうじ
神田忠司 三佐。第一中隊長。空挺出身。

なんばたけじろう
難波武次郎 准尉。最先任上級曹長。

とみさかしょう
富坂俊郎 三尉。空挺出身。団司令部付きだったが、魚釣島に派遣された。

〈航空自衛隊〉

まるやまたくみ
丸山琢己 空将。航空総隊司令官。

ながせゆたか
永瀬豊 二佐。原田が所沢の防衛医大付属病院で世話になった医師。防衛医大卒で陸上自衛隊のレンジャー・バッジを持っている変

わり者。

みやげたかとし
三宅隆敏 三佐。予備自衛官。五藤彬の恩師。

(総隊司令部)

はぶみねみつ
羽布峯光 一佐。総隊司令部運用課別班班長。

きたがわ えいこ
喜多川・キャサリン・瑛子 二佐。情報将校。横田出身で、父親はイラクで戦死したアメリカの空軍将校。

いがらしひろし
五十嵐洋 二佐。陸上総隊運用部所属。ウイングマークの持ち主のヘリ屋。

しんじょうあい
新庄藍 一尉。父親は防府の鬼教官だった。TACネーム：ウィッチ。

(警戒航空団)

とがわけいこ
戸河啓子 二佐。飛行警戒管制群副司令。ウイングマークをもつ。

(第六〇二飛行隊)

うちむらいたいじ
内村泰治 三佐。第六〇二飛行隊副隊長。イーグル・ドライバー上がり。

(第三〇七臨時飛行隊)

ひだかまさあき
日高正章 二佐。飛行隊長。

〈海上自衛隊〉

みなみみきあき
佐伯昌明 元海上幕僚長。太平洋相互協力信頼醸成措置会議の、日本側代表団を率いていたが、バイオ・テロによる感染症で死亡。

かわはた 寿 たか
河畑由孝 海将補。第一航空群司令。

しもぎのしげき
下園茂喜 一佐。首席幕僚。

いせざきたもつ
伊勢崎将 一佐。第一航空隊司令。

(第一護衛隊群)

くにしましゅんじ
國島俊治 海将補。第一護衛隊群司令。

うめはらとくひろ
梅原徳宏 一佐。首席幕僚。

(航空集団)

ひのうえこうた
樋上幸太 二佐。P-1乗り。前職は鹿屋の第一航空隊幕僚。航空隊総司令部のエイビス・ルームに参加。

〈内閣〉

あせうしろう
阿相士郎 総理大臣。

〈外務省〉

かたくらもついちろう
片倉宗一郎 外務審議官。サイレント・コアの内部事情にも明るい。

くじょうひろし
九条 寛 外務省・総合外交政策局・安全保障政策課係長。〆ヘブン・オン・アース、日本側の事務方トップ。

〈防衛省〉

〔陸幕防衛部〕

うしじまやすお
牛嶋保夫 陸上幕僚長。陸将。

たけよしりのり
竹義則 二佐。航空隊総司令部のエイビス・ルームに参加。

〔海幕防衛部〕

ふくはらくにひこ
福原邦彦 二佐。海幕防衛部装備体系課付き。前職は護衛艦の艦長。
航空隊総司令部のエイビス・ルームに参加。

（警察庁）

ひいらぎなかと
柊木尚人 警視長。関東管区警察局・サイバー局参与。

はいたにあきお
灰谷昭雄 元警部。警視庁公安部のベテラン捜査官で、定年退職後、井藤浩のもとで働く。

いとうひろし
井藤浩 元一佐。工学博士。陸上自衛隊初のサイバー戦部隊を立ち上げた後、民間に転じた。政府のセキュリティ・クリアランスを持つ。

/// アメリカ ///

〈空軍〉

オリバー・R・エバンズ 中佐。第18戦闘航空団の作戦参謀兼E Xのインストラクター。

エルシー・チャン 少佐。中国系。

/// 中国 ///

（中南海）

パンホンダ
潘宏大 中央弁公庁副主任。

（国内安全保衛局）

チンチョウファン
秦卓凡 二級警督（警部）。

スウユエ シユウエンロン
蘇躍 警視。許文龍が原因でウルムチ支局に左遷されたと思っていた。

（科学院武漢病毒研究所）

マリモン
馬麗夢 博士。主任研究員。

〈海軍〉

(総参謀部)

レン ユオアン
任思遠 少将。人民解放軍総参謀部作戦部特殊作戦局局長兼特殊戦司令官。四一四突撃隊を立ち上げた。

ホアントン
黄桐 大佐。局次長。

(`蛟竜突撃隊。)

シユイソントン
徐孫童 中佐。`蛟竜突撃隊、を指揮する。

ソンチン
宋勤 中佐。元少佐の民間人で、北京大学日本研究センターの研究員だった。任思遠海軍少将に請われ復帰した。

(南海艦隊)

トンシヤオニン
東曉寧 海軍大将 (上将)。南海艦隊司令官。

ホワイーチ
賀一智 海軍少将。艦隊参謀長

ワントン
万通 大佐。艦隊対潜参謀。

(東海艦隊)

タンドンミン
唐東明 大将 (上将)。東海艦隊司令官。

マ チンリン
馬慶林 大佐。東海艦隊参謀。アメリカのマサチューセッツ工科大学でオペレーションズ・リサーチを研究し、博士号を取った。その後、海軍から佐官待遇でのオファがあり、軍に入る。唐東明の秘蔵っ子。

(K J - 600 (空警 - 600))

ハオフエイ
浩菲 中佐。空警 - 600 のシステムを開発。電子工学の博士号を持つエンジニア。

イエファン
葉凡 少佐。空警 - 600 機長。搭乗員六人のうちの唯一の男性。

チンイー
秦怡 大尉。副操縦士。上海の名門工科大学、同済大学の浩菲の後輩。電子工学の修士号をもつ。

カオシュエビン
高学兵 中尉。機付き長。浩が関わるずっと前から機体開発に関わっていたベテランエンジニア。

(Y - 9 X 哨戒機)

チオンクイラン
鍾桂蘭 少佐。AESAレーダーの専門家で、哨戒機へのAESAレーダーの搭載を目指す女性。

(第164海軍陸戦兵旅団)

ヤオイエン
姚彦 少将。第164海軍陸戦兵旅団を率いる。

ワンヤントン
万仰東 大佐。旅団参謀長。

レイイエン
雷炎 大佐。旅団作戦参謀。中佐、兵站指揮官だったが、姚彦が大佐に任命して作戦参謀とした。兵士としては無能だが、作戦を立てさせると有能。

タイイーチ
戴一智 中佐。旅団情報参謀。情報担当士官だったが、上官が重体になり旅団情報参謀に任命された。

〈陸軍〉

コンシュエリ
孔雪麗 中尉。情報部所属。中国の少数民族の一つである京族。

イェンチェン
顔誠 軍曹（中士）。孔雪麗の部隊ナンバー2。

（日越人材ブリッジ）

ディン・レイ・スエン 代表取締役。京族。

ファンガオユエン
張高遠 博士。人民解放軍の極秘研究機関`S機関、所属。`宅男、の風貌だが、数理データ・サイエンスの若き天才で、ある任務を命じられ寧波海軍飛行場に派遣された。

///シンガポール/// 〈インターポール・反テロ調整室〉

シユエンロン
許文龍 警視正。R T C N代表統括官。

メアリー・キスリング R T C Nの次長。F B Iから派遣された黒人女性。

しばたゆきお
柴田幸男 警視正。警察庁から派遣されている。

パクボムホ
朴机浩 警視。韓国警察から派遣されている。

///イギリス/// 〈英国対外秘密情報部（M I 6）〉

マリア・ジョンソン M I 6極東統括官。大君主。オーバーロード

東シナ海開戦8

超限戦

プロローグ

タイ航空の成田行きエアバス330型機は、バンクをようやく午前二時に離陸した。本来なら、その便は、日付けが変わる直前に離陸し、午前八時に成田に到着する予定だったが、東シナ海の戦乱を避けてフイリピンはマニラ方面へと迂回したせいで、更に遅れ、一〇時間を超える長いフライトとなった。

ハノイ・日本便を筆頭に、東南アジアと日本や韓国を結ぶ便が、戦乱を避けて運休していたため、その便は満席で飛んでいた。

成田空港のボーディング・ブリッジに横付けされた時は、乗客は皆くたくただった。日本人の乗

客は少なかったが、彼らが飛んでいる間に日本は政権交代していた。

尖閣諸島で発生した、自衛官の多数死傷事案を受けて、内閣は責任を取って総辞職したということになっていった。もちろん、その「事案」なる出来事に関して、国民への詳細な説明は一切無かった。

海外では、当事者である中国や台湾で比較的、自由な報道が流れていたが、日本政府は、いかなるコメントもしなかった。

機体の後部、エコノミー座席に乗っていた、孔雪麗・人民解放軍陸軍中尉は、四隅が少しほつ

れた使い込んだ感じのザックを抱いて機体を降りた。二〇リットルのザックは私物でパンパンに膨れ上がっていた。

彼女らだけ十名ほどが別室に案内され、入国審査官の質問を受けた。全員、東京の、とある旅行代理店の黄色いバッジを胸に付けていた。

五、六人の入国審査官に取り囲まれ、全員がザックから出した技能実習生の関係書類をテーブルに並べ始めた。

上司と思しき初老の男性は、笑顔を絶やさず、「ええと……、ここで、日本語が一番上手なのは誰かな？」とゆつくりと尋ねた。

集団の先頭にいた孔中尉は、躊躇わずに右手を挙げた。

「でも、少しです」

「まあ、女性は上達が早いよね」

と手招きして、テーブルを挟んで自分の正面に

座らせた。

「グエン・ティ・ランさん。貴方の地元、最近、日本企業が、進出してますね？ 工場を建てた。

そこでは働かないの？」

「はい。機械工場です。募集、二百人。三千人が応募しました」

「まあそうだろうね。日本語はどのくらい勉強しましたか？」

「自分で二年間、ドラマやアニメで。日本語学校で、半年間、勉強しました。一日中」

「そう。とてもお上手だ。書類は問題なし。工場は、危険な仕事だから気をつけて下さい」

そして入国審査官は、突然ベトナム語に切り替えた。そこそ流ちょうなベトナム語に、孔中尉は一瞬、驚いた顔をした。

「男関係には気をつけなさい。予期しない妊娠で、仕事が出来なくなり、住む場所もビザも失い、日

本国内で逃げ回る羽目になるベトナム人女性が後を絶たない。お金を儲けたいでしょう？」

「もちろんです。気をつけます」

孔中尉は、そこでようやくわかった。彼は、自分にはなく、後ろに突っ立って不安そうにしている男たちに警告しているのだ。手を出すなど。

「そう。都会は、ハノイでも東京でも誘惑が多い。どうぞ、目標を定めて、お金を稼いで、無事に帰国して下さい。われわれは、こんな大変な時に来てくれた皆さんを歓迎します！」

審査官は、音を立て勢いよく法務省のスタンプをポンポンと押して、全員を送り出した。

第一関門は無事に突破だ。書類に不備はないし、全員、ネイティブのベトナム語を話す。むしろ、彼女らにとっては、中国公用語の方が外国語に近い。

空港を出ると、代理店の旗を持った中年女性が

待ち構えていた。迎えの観光バスに乗り込んだ。

「運転手は気にしなくて良いわ。彼は北京語とベトナム語の違いもわからないから」

だが、念のため、全員、バスの後ろの方に腰を下ろした。

「問題は無かったわね？」

と派手なネックレスをした女性は、ベトナム標準語で孔中尉に尋ねた。

「ええ。飛行機は大変でしたけれど」

「私なんて、朝の六時からここで待っていたのよ」

「こっち、あそことは反対側ですよね？」

「それは気にしなくて良いわ。電車で何処へでも行ける。車も別途確保してあるから。貴方たちには早く、この街に馴染んでほしいわ」

バスが都心部に近づくと、若い男性兵士が、「高層ビルとか少ないなあ……」と呟いた。

「ある所にはあるけれど、上海のようにはいかないわね。この国は、三〇年不景気が続いて、今や先進国とも言えないほど落ちぶれたから。貴方たちが覚えた日本語は、この戦争が終わったら、もう使い道もないでしょう。ただ日本は屈服し、私たちは、日本という存在自体を忘れ、無視して世界を征服する——」

孔中尉は、ごくりと生唾を飲んだ。その偉大な作戦の尖兵として、自分らはこの国に潜入したのだ。命じられた作戦を、忠実に、完璧にやり遂げなければならなかった。

人民解放軍による東沙島奇襲攻撃に端を發した極東の騒乱は、尖閣諸島の争奪戦へと發展し、その攻防はすでに発端から十一日目、尖閣に解放軍正規軍部隊が上陸してから五日目を迎えていた。

この間、魚釣島に部隊を上陸させた台湾軍の戦果発表や、解放軍のプロパガンダがあったものの、日本国内では、もっぱらシージャックされた豪華客船の動きに報道が集中し、国内では、尖閣諸島を巡る情報は、インターネット上にしか存在しなかった。

すでに数千発のミサイルや無人機が飛び交う事態に發展していたが、それを報じることによって、日中の戦乱を拡大させてよいのか？ という政府の警告をマス・メディアは受け入れ、それを積極的に報じる所はなかった。

ところが、ようやく腹をくくった政府が、陸上自衛隊・水陸機動団の第一波を魚釣島に上陸させようとしたところ、反撃を喰らい、一挙に七〇名にも達する戦死者を出してしまった。さらに、水機団指揮官を乗せたエア・クッション艇が解放軍に拿捕（だほ）されるといっておまけまで付いた。

日本政府は、未だに起こった事態の詳細を公表することはなかったが、事態の責任を取るとして総辞職した。

昨日まで、戦略的忍耐をモットーに、限られた部隊でどうにか孤島の戦線を支えていたが、それも限界に達しつつあった。

第一章 休戦日

第一空挺団・第四〇三本部管理中隊、その実、特殊部隊サイレント・コアを率いる土門康平どもんこうへい陸将補は、魚釣島西端の僅かな空き地で、まだ放熱しているオスプレイの残骸の前に立っていた。

飛行機としての原形はすでに留めていない。両翼のエンジンは何処かに吹き飛び、胴体は、まるで腹が割けて腸が飛び出した後の魚のように不気味に口を開いている。そしてコクピットは、辛うじてフレームが残るのみだ。

コクピット・シートも、フレームが残るのみ。しかも歪んでいた。パイロットは、そこに座っていたはずだが、すでに骨格も残っていなかった。

カーボン製の航空ヘルメットですら焼け落ち、パイロットの遺体がどの程度残っているかもわからない。熱気のせいでもここまで近寄れないのだ。昨日から丸半日、ポンプで海水をかけ続けたが、熱はそこまで酷かった。

撃墜されたわけではない。たまたま、島の反対側から飛んで来た迫撃砲弾が、着地したばかりのオスプレイの胴体を真上から直撃したのだ。

もう一機、離陸途中に殺られ、すぐ沖合に墜落したオスプレイは、幸いと言っては何だが、パイロット・クルーしか乗っていなかった。

だが今、目の前にその残骸を横たえる機体は、



満席状態だった。正確に何人乗っていたかはまだ判然としない。だが、正副パイロットを含めて、確実に二六名は乗っていたはずだった。

そして、上陸直後、散開途中に、迫撃砲弾による攻撃を受けて、三〇名以上が戦死した。負傷者はその二倍以上に上る。二個中隊が上陸を試み、半数は、一発も引き金を引くことなく、戦死するか負傷して、そのまま引き揚げる羽目になった。

全くの偶然なのか、狙ったのか、敵の迫撃砲攻撃と、水機団の上陸はびったりとタイミングが合っていた。そして、後にわかったことだが、鉄砲の弾もないと思われた敵には、海中から無人潜水艇を使った大規模な補給があったばかりだった。

背後から、足音が忍び寄って来る。

「隊長、いつまでこんな所に突っ立っているんですか？ 火傷の跡が悪化しますよ」

一個小隊を率いる原田拓海一尉が呼びかけた。

土門は、このオスプレイが爆発した時、すぐ近くにいたのだ。助ける術も無かった。敵集団が海中から上陸してきて、すぐ銃撃戦になった。銃撃戦というか、一方的な殺戮だった。ほとんどの隊員は、銃にマガジンを装着する暇も無く倒れたのだった。

土門は、手と鼻に火傷を負っていた。

「姜三佐に部隊を任せるのは早いと思うか？」

「司馬さんに戻ってきてもらうしかないでしょう。

引退して囲碁だの盆栽でも始めますか？」

「そうだな。民間軍事会社の役員に収まって、あの人から毎日いびられるのもまっぴらだしな……」

「こうなつてから、もう一日経つ。幸い、敵の攻撃はないが、そろそろ次の手を打つてくることでしょう。部隊を建て直さないと」

「君らがいるから大丈夫だろう。これ、遺骨の回

収とかなできるのか？」

「回収はできるでしょうが、ここまで焼かれては、DNAの採取も難しい。人定が無理では、それもあまり意味はないですね。せいぜい、機長席と副操縦士席の遺骨の区別が付く程度だ」

「隊員が持っていた手榴弾とかの爆発物は？」

「だいたい燃えたはずですよ。危険は無いと思いましたが。爆風で吹き飛ばされた奴は、装具というか、胴体ごと回収したつもりです。あのピンは簡単には抜けませんから」

「君は平気なのか？」

「自分は、こういう時には、衛生兵としての使命感のスイッチが入るので、PTSDとか考えている余裕はないですね。カウンセリングでも必要ですか？」

「引き揚げたら、どこかの禅寺にでも引きこもって、坊さんの説法でも聞くさ」

「新しい総理というか、再登板の総理は、うちの部隊と因縁があるという話がありますが？……」

「それはなあ、いささか複雑な話だ。この部隊を立ち上げたのは誰だと思う？」

「あの、名前を口にする縁起が悪いとかいう、前隊長ではないのですか？」

「その前隊長に、こういう部隊を作れ、については、予算はここから持って来いと指図した政治家がいる。それが現総理大臣だ」

「それは変ですね。現総理が政界入りしたのは、確かソヴェエト軍のアフガン侵攻前後の事です。その頃は、まだ、あの人も尉官で、そんな実力も無かったはずですよ」

「そうだ。現総理がそれを、ぺいぺいの一尉だったあの人に命じたのは、たしか十数年前のことだ。総理大臣として命じた」

「は？」

原田は、言っていることがわからないと首を傾げた。

「つまりさ、この問題は、俺の部屋の、例の金庫の案件の一つだ。タイム・パラボックスの一つだ。深く考えるな。部隊は今こうして存在し、国の危機を何度も救ったという事実が大事だ」

「わかりました。考えないことにします。まさかそれ、自分の妻の件と繋がっていないですよね？」

「そうなのか？ いやあ、それは誰にもわからない。ある日、自分のマンションに帰宅したら、見知らぬ中国人女性がキッチンで味噌汁を作っていて、ダーリンお帰り！ とか出迎えたなら、そらまあ君がタイム・パラボックスに放り込まれたということだよな。悩んでも仕方無いぞ。空飛ぶ円盤の正体を探ろうとしても無駄だ。現代科学で理解出来ないことは、ただ受け入れろ」

土門は、眼をパチパチさせた後に首を項垂れた。^{うなだ}
「俺は、この島を去るまで、あと何度ここに足を運ぶんだろうな……」

前日に迫撃砲弾の爆風で吹き飛ばされた指揮所も、今は元通りに復旧されていた。指揮所は、島の南西斜面に、ジャングル・キャノピーを利用して設けられていた。

本来の予定では、彼らは、そこを水機団に譲り、今頃は、習志野に引き揚げて、一週間ぶりに風呂でも入ってベッドの上で寝ているはずだった。

「なあ、ガル。お前さんは何か思うことはあるか？」

土門は、ラックに据え付けられたモニターに一瞥をくれた後、戦場監視システムの管理を一人で引き受ける、ガルこと待田晴郎^{まちだはるお}一曹に聞いた。

「七〇人もの仲間が鉄砲の引き金を引く暇もなく戦死したのは、俺が監視任務を完璧に果たせなか

ったからという話ですか？ 悔やんでどうなるものでもない。責任を取るのは士官殿だし。これだけ無人機が発達して、水中無人機も開発されているのに、中国がそれを持っていないと想定するのはおかしい。それが海自の監視網をすり抜けて、島に接近することを想定すべきだったとは思いますが、天候不順で頼みのスキャン・イーグルでも下は見えず、接近も回収場面も察知出来なかった。残念ですが、こういうことは今後とも起こりうる。もし、日本に軍法会議があつて、われわれが裁かれても、自分も隊長も無罪ですよ。起こったことは不可抗力だった。戦場という霧の中では頻発する現象です。遺族に向かってそんなことは言えないが、それが現実です」

「日本の警察はさ、俺たちを業務上過失致死で逮捕するかも知れないよな？」

「それはありますね。過去に何度か、航空自衛隊

の墜落事故を巡って、警察が介入の意思を見せたことはありますから。その時は、仲良く刑務所に入りましょう。それまでは淡々と任務を果たすまでです」

「何かニュースは？」

「ネットのご意見を読む限りでは、永田町の新政権は、国民に概ね好評のようです。客船乗っ取りも片付いたことだし、ここで起こっていることを政府が公表し、いよいよ防衛出動命令を下すのでは？ という憶測が出ているそうです。」

この二四時間、敵に動きはほとんどなし。昨日、水機団司令部一行を陸に揚げてお茶した以外の動きは認められません。乗っ取られたエア・クツシヨン艇も動きはなし。水機団長以下、今どこにいるかは不明ですが、こちらの通信システムに関しては、新しい暗号化ROMが届いたので、もう盗聴の心配はありません。まあ、解放軍は、水機

団司令部が持参した無線機を見て驚いたと思いますよ。今時、こんな前世紀の遺物を使っている軍隊がいたのかと。大陸については、疫病の拡大に関する情報は全くありません。五毛党が頑張つて、ネットでの書き込みを削除しています。逆に、戦果に関するプロパガンダは拡大しているようです。解放軍が日本から奪ったのは、イージス艦ではないか？ いやへり空母だろう、という大風呂敷な噂が飛び交っています。

台湾側も意気軒昂。自衛隊はヘマをやらかしたが、自分たちが押ししていることは疑いようがない。このまま支えきれぬだろうと。そんなところですね」

「敵は、何をやっているんだらうな？」

「海幕が、無人潜水艇のペイロードを計算して遣ましました。たぶん、搭載するバッテリーなり燃料を減らせば、五トン前後のペイロードは確保でき

るはずで、大陸沿岸部から尖閣までの距離を考えると、その程度は陸揚げできたはずだと言っています。敵の戦力はすでに一個中隊残っていたかどうかです。一個小隊当たり、仮に五トンもの補給があつたら、中には当然食い物も入っていたことでしょう。昨日は戦果を上げた後の休戦と割り切つて、喰つて寝て過ごしたんでしょう」

「仮に一隻五トンもの物資なら、陸揚げするにも相当の時間を食うよな？」

「時折、横殴りの雨も降ってましたからねえ。あの時、天は解放軍に味方していた」

「あれで兵隊を補充した可能性はないのか？」

「海自は無いと見ているそうです。速度が出ないから、航海は二日掛かり。鍛えられたコマンドでも、その間、レギュレーターホースを啞えて呼吸し続けるのは難しいし、人が過ごせるよう水密区画を設置して生命維持装置を組み込むには小さく

ぎる。コマンド二、三人の移動なら可能かも知れませんが、それも危険でしょう。届けられたのは迫撃砲弾にミサイルに銃弾にドローンにバッテリー、食料に医薬品。受け取った兵隊の数を推定すると、歩兵一人ではとても担げないほどの量です。彼ら、あと三日は余裕で戦えるでしょうね」

「今夜、仕掛けて来ると思うか？」

「あの無人艇が発進したのは三日以上前です。この状況を見越して発進させたとしたら凄いが、それでも、こういう戦いになると備えて発進したとは思えない。自分は、そんなに奇天烈な新兵器が出てくるとは思いません。結局は、オーソドックスな手法で仕掛けてくるしかない。変数としては、敵にはエア・クツション艇と捕虜が加わり、その捕虜は、ここの情報を全部持っていて、われわれは、味方が乗っているだろうエア・クツション艇をおいそれとは攻撃できないことです。やり辛く

なったことは事実です」

「日本語を喋った士官は、紳士的だったそうじゃないか。彼らがジュネーブ条約を尊重するならば、戦場に捕虜は置かないだろう。爆撃するのが一番楽だが……」

「あの総理、警察比例の原則とか無視しそうですからね」

足音が響いて、稜線上に登っていた姜かんあや夏三か佐が降りて来た。代わって原田が指揮所を出て行く。万々に備えて、士官が一箇所に集まらないよう気をつけていた。

「水機団の増援はどうなっているのですか？」

姜三佐が聞いた。

「さあ、誰が決めるんだろうな。あの惨劇から一昼夜経過したのに、飛んでくるへりは、ただ負傷者と肉片を拾って帰るだけだ。だいたい無理だろう。また着陸時に迫撃砲を喰らって、墜落でもし

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。